

巻頭メッセージ

「品質」誌の特集の編集方針



早稲田大学 教授 理工学部 経営システム工学科
 (第31年度「品質」誌編集委員会 委員長)
 永田 靖

昨年の11月より新しいメンバーで「品質」誌の編集委員会がスタートしました。そのときから、投稿論文を審査する投稿論文審査委員会と、特集を担当する編集委員会に分け、鈴木和幸先生が前者の委員長を、私が後者の委員長を勤めさせていただいています。

日本品質管理学会では、ずいぶん前から特集が企画され、学会誌に掲載されてきました。また、事業所見学会、シンポジウム、チュートリアル・セミナー、クオリティ・バブなどのようにさまざまな行事も企画されています。

最近では、他の学会でもチュートリアル・セミナーや特集記事の掲載など、啓蒙活動に力を入れるところが増えてきました。研究発表会の開催やオリジナル論文の掲載だけでは、参画するのは学会の中のごく一部の人に限られるからです。文字どおり切磋琢磨の観点から、多くの会員にとって有用な情報を共有することが重要だと認識されてきたからだと思います。

そういった意味では、日本品質管理学会は他の学会に先駆けていたといえます。

こういったこれまでの経験を大切にしながら、編集委員会では、次のような基本的方針に基づいて特集の編集活動を行っていきたいと考えています。

(1) 学会として行うべきことをいつも意識したい。「品質」誌の特集について述べますと、学会誌と商業誌との区別をいかにつけるかが大切です。

(2) 中立的な立場から、できるだけアカデミックに説明したい。学会誌の企画ですからよい事例があれば、うまくいったという結果だけではなく、なぜうまくいったのかという観点を重視したいと思います。もちろん、いつもそのようなことが可能とは限りません

が、そういった切り口で編集したいと考えています。

(3) 他の文献を参照しなくても、その特集をひととおり読めば、基本的な部分から応用部分までの知識が得られる (self-contained と呼びます) ようにしたい。さらに、その分野に興味を持っておられる読者の方々が、その分野を深く勉強をされる際の橋渡しになればとも思います。

(4) やさしい言葉で解説したい。アカデミックというと、どうも難解だというイメージがつきまといま。投稿論文ならやむを得ないところがあります。しかし、特集は啓蒙や情報共有が目的ですから、わかりやすく編集するよう努力したいと思います。

わざと難しい言葉を使って説明すること、類義語を無用に反復することは、相手を煙に巻く常套手段です。少なくともこのようなことは避けたいです。そうでないと言葉遊びになることが懸念されます。

私の敬愛するある方が、この文脈とは異なりますが、次のように言われたことがあります。「わからないことがあれば、「私にはわかりませんから別の言葉でわかりやすく説明してください」とはっきり言いなさい。本質的なことは、わかりやすい言葉で必ず説明できるはず。それができずとすれば、説明者自身が実は理解していないか、相手をごまかそうとしているかのどちらかです。」この言葉を説明する側も質問する側も、文字どおり100%実現することは大変難しいことです。しかし、いつも頭の片隅においておきたいと思っています。

今後の特集テーマとして、「商品企画システムの構築」「タグチメソッド」を編集する予定です。